

【解説】花鳥の間 <sup>なみかわ そうすけ</sup> 濤川 惣 助 の七宝額と <sup>わたなべ せいてい</sup> 渡辺 省 亭 の原画（東京国立博物館所蔵）の比較

東京藝術大学大学美術館長 黒川廣子

<sup>あか げ ら ひのき</sup>  
《赤 啄木鳥 に 檜》



《赤啄木鳥に檜》



原画（東京国立博物館蔵）

七宝額（内閣府迎賓館蔵）

原画の鳥には目に白い点があるのに対して、七宝額の鳥の目は黒一色に見えますが、この差は花鳥の間のすべての作品に共通しています。原画に忠実に七宝で再現したといわれていますが、異なる印象を受けるところが少なくありません。この <sup>あか げ ら</sup> 赤 啄木鳥 の腹部、足から尻の下にかけて、原画では細かい筆線で描かれたのに対して、七宝額の羽毛の部分を輪郭線がなくふわふわとぼかし、いかにも柔らかそうです。背景の木の枝を表す筆の濃淡や、太陽の色を思わせる赤味がかった空を下方にかけて青味がかった灰色にぼかす見事な表現から、原画の再現に細心の注意を配ったことが見て取れます。



原画部分



七宝額部分

つばめ きょうちくとう  
 《燕に夾竹桃》



原画（東京国立博物館蔵）



《燕に夾竹桃》

七宝額（内閣府迎賓館蔵）

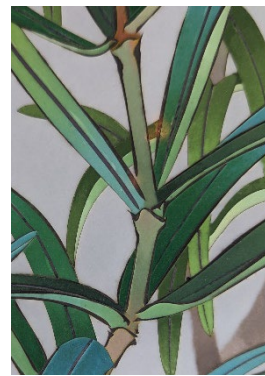
夾竹桃きょうちくとうの花弁や蕾を無線七宝で表していますが、茎や葉は輪郭を描く有線七宝で表し、対照的です。原画の花弁には輪郭線があり、また葉の葉脈が太く、影を表すように二重線で表現されていますが、七宝額の方の葉脈を一本の線とし、付け根の部分を太くして抑揚を表しています。一見、つばめつばめの背中や羽は黒一色に見えますが、七宝額をよく見ると黒と灰色のゆうやく釉薬を用いており、原画の筆跡を複数の黒の濃淡のゆうやく釉薬によって再現することを試みています。



原画部分



七宝額部分



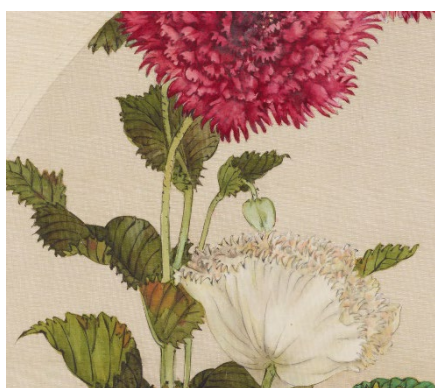
ひばり けし し きくらそう  
《雲雀に罌粟・桜草》



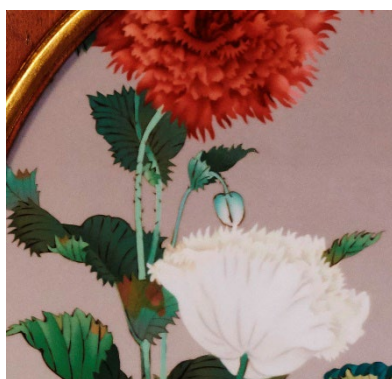
原画（東京国立博物館蔵） 七宝額（内閣府迎賓館蔵）

七宝額の罌粟の花の輪郭線を抜いた無線七宝で表していますが、この細かなギザギザの線の形を銀線で作成することは感嘆すべき仕事です。また、同じくギザギザの葉の輪郭線に七宝の銀線が用いられていますが、原画よりも線の太さを微妙に調整して、その線が葉の形を引き立たせ、また、茎に見る棘も原画より鋭く、触れば痛そうな形に見えます。桜草についても、原画の輪郭線を七宝では無線とし、よりたおやかな印象としています。

雲雀の腹部には、《赤啄木鳥に檜》と同じように、いかにも柔らかそうな羽毛を表しています。



原画部分



七宝額部分

こまどり ふじ  
《駒鳥に藤》



原画（東京国立博物館蔵）



七宝額（内閣府迎賓館蔵）

原画の藤の花弁の鮮明な輪郭線に対して、七宝額は輪郭線がわずかにありながら花も葉も無線としているところが多く、印象が異なります。七宝額の右側の藤はほとんど輪郭がないせいか、茎の細かい線が目立ちます。また、原画ではほとんど確認できませんが、七宝額の藤の花弁の<sup>がく</sup>萼の形や花弁との間の黄色い部分や、淡いピンクから紫、濃い青色へと変化する細やかなぼかしが絶妙です。原画には見られない<sup>こまどり</sup>駒鳥の爪の鋭さは、銀線による金属ならではの表現であると言えます。



原画の藤の部分



七宝額の藤の部分



原画の駒鳥の爪の部分



七宝額の駒鳥の爪の部分